

(ひと) 貞末麻哉子さん 障がいがあっても「普通」に生きる試みを映画に撮った

会員記事

2020年10月27日 5時00分



貞末麻哉子さん

重い障がいがある子どもも、その親も、地域で人とかわりあいながら「普通」に生き、死ぬ。そんな試みを追ったドキュメンタリー映画「普通に死ぬ～いのちの自立～」が公開中だ。

2011年公開の「普通に生きる」では、医療的ケアが必要な子どもも地域で暮らせるよう、親たちが静岡県に設けた通所施設の5年間を追った。「普通に死ぬ」はその後8年の記録で、子を支えてきた親が病に倒れた後の、家族や支援者の葛藤と模索を描いた。

東京都出身。19歳の時から映画にかかわり、障がいや病と向き合う作品などをつくってきた。自らカメラを抱えて取材し、「私はだれも監督していない。教えてほしい

と思っている」から、監督と名乗るのは好きではない。

「生きる」の撮影を始める時、数週間で撮れると思っていた。でも障がいのある子と親のだんらんをみて、家族の関係性が「すごく普通」と感じ、障がいのない自分たちの生活が普通だという価値観を壊された。もっと壊してほしいと13年以上通うことになった。

親たちから「この子より先に死ねない」といった言葉を聞く。子を支えられなくなるからだ。親が先に死ねない世の中でいいのか。

「家族に任せて『頑張れ』というのではなく、手をさしのべられる社会でなければ。親も子も社会に貢献できるのですから」(文・松下秀雄 写真・山本和生)